

## 成長の糧を外から得る

JR富山駅から立山連峰に向かって車で1時間弱。海外売上高が約20億円を誇る建設会社がある。丸新志鷹建設(富山県立山町)だ。

同社の従業員は60人ほどで、2017年2月期の単体売上高は34億円。うちネパールとブータンでの売上高が6割を占める。社長の志鷹新樹の下には、日本の技術を学ぼうと同社のネパール人社員や研修生が集う。

本誌9月11日号に掲載した建設会社決算ランキングによると、同社の海外土木売上高は、大手や中堅の建設会社に次ぐ17位。政府開発援助(ODA)案件の比率は25%と比較的少ないのが特徴だ。

8月時点での進行中の工事の受注額はネパールで53億円、ブータンで11億円に上る。大半のプロジェクトは世界銀行やアジア開発銀行が融資する案件で、同社は中国企業などとの国際競争を勝ち抜き、現地の政府や自治体から直接受注した。

規模が最も大きいのは、ネパール西部にあるカルナリ川の流域2万haを灌漑するために、延長5.6kmの幹線水路と排砂施設を築く工事だ(写真4)。同国灌漑省から31億8500万円で受注した。工期は12年11月から18年1月までを予定する。

ブータンでは、人口流入が著しい首都ティンブー市の近郊31haに、

道路や水道を整備する都市開発工事が進む。受注金額は4億2200万円で、19年2月の引き渡しを目指す。

### 来日した研修生が戦力に

同社は、林業の衰退した地域の雇用の受け皿として、志鷹の父が1952年に創業した。治山・治水工事などを得意とする。

ネパールに支店を開設したのは92年。「当時は日本国内の建設投資が好調だったこともあり、海外に支店を出すことにさほど抵抗はなかった」と志鷹は振り返る。

地元立山町の学校とネパールの学校が姉妹提携を結んだのがきっかけ

だ。「建設会社としてネパールの国づくりに貢献できないか」と考えた志鷹は、中央職業能力開発協会の制度を利用し、現地の学校の卒業生を日本に招いて研修を実施。10年間で延べ88人を受け入れた。

ところが、1年の研修を終えてネパールに帰国しても、山岳ガイドの仕事があるくらいで、せっかく身に付けた建設の技能を生かせない。そこで、自社の社員としてネパール支店で働いてもらうことにした。

まずは、現地の建設会社を買収。そこから下請けする形で、警察学校の校舎や人道橋の吊り橋の工事などを始めた。「現地の会社と共同出資して小水力発電所を建設し、売電収入を得るなど、様々な仕事で食いつないでいた」と志鷹は言う。

トラブルも続出した。政変で工事の契約が4年間もできなかったり、用地買収の遅れで1年半の工期が3年に延びたり、反政府組織にトラックを焼かれたり。履行保証を得るために、志鷹の生命保険まで担保に入れ



写真4 ネパールでのカルナリ川灌漑工事(左)と、ブータン・ティンブー市の都市開発工事(写真:丸新志鷹建設)

なければならないこともあった。

それでも工事を誠実に完成させたことで、「さすがは日本企業だ」との評価を獲得。ネパール政府がわざわざ入りへの参加を呼び掛けてくるようになった。評判はブータンにも伝わり、受注につながっている。

### 「日本人は來てくれるな」

ネパール支店では現在、15人ほどのネパール人が働く。日本人は1人だけだ。権限の多くを移譲して、独特の商習慣を持つ現地の発注者との交渉や営業に対応している。

ネパールやブータンの工事の粗利益率は5~20%と波が大きい。「日本人は人件費が高いので来てくれるな」と言われている」と志鷹は肩をすくめる。

「海外の仕事をやっていてよかつたなと言えるかどうかは、今後次第だ」と志鷹。単純に海外で稼げるかどうかが問題なのではない。

日本国内の山間部の厳しい工事では、お金を出しても作業員が集まらなくなっている。「ネパールから来てもらうことができれば、他社とは違った強みになる」と志鷹は話す。

丸新志鷹建設の売上高の推移

年度	売上高(億円)
2012年	45
2013年	30
2014年	45
2015年	45
2016年	30
2017年	35

▲丸新志鷹建設の売上高の推移

ネパールで大型工事を元請け  
志鷹 新樹×丸新志鷹建設(富山県立山町)